



上:ヘスース・パストール(写真: Jesús Garceche)
右:ジョナサン・オリヴィエ(写真: Hugo Glendinning)



マンチェスター・シティ・バレエ『コッペリア』
リエ・マツミヤ&アダム・デンマン
(写真: Caroline Holden)

1月号の主な記事:ヘスース、オリヴィエ、そして『コッペリア』

Translation by YUKI NAGANO

今月号のインタビューに登場する二人のダンサーは、伝統的なバレエの世界を捨てて新しいジャンルに飛び込みました。まずは、ヘスース・パストール。ヴィクトル・ウリャーテのカンパニー、ナチョ・ドゥアトのスペイン国立バレエ団、スコティッシュ・バレエ、イングリッシュ・ナショナル・バレエ、アメリカン・バレエ・シアター等で活躍した、傑出したクラシック・ダンサーです。なぜこれほどの国際的なキャリアを投げ打ってコンテンポラリー・ダンスの未知の世界に飛び込み、新カンパニーを立ち上げたのか。関心を持たずにはおれません。

ジュスティン・パヨド・エスポスがパストールにインタビューしたのは『人類のための四季』の終演後、マドリードにあまたある小劇場のひとつである、サラ・トリアンゲーロ劇場でした。多彩で求心力のあるこのソロは、パストールが2007年に設立したヒューマン・ダンス・プロジェクトのための2作品のうちの一つ。確固たるキャリアを捨てるだけではまだリスクが足りないともいわんばかりに、伝統的なダンスファンの嗜好をはっきりと否定し、クラブ風の装置とディスコ・ミュージックを用い、観客にもかなりの程度の参加を要求する作品です。

「すでに誰かが作ったバレエをレパトリーとして新しいプロジェクトを始めるなんて、簡単なんです。でも、何かを始めるならリスクを負わなくちゃいけない」パストールは語ります。「こんな風に踊って、これをやって、あれをやって。こう踊らなくちゃいけない、あんな風に動かなくちゃダメ。そういうのに、僕は飽きてしまったんです。どんな要求を出されようと、その通りに動けますよ。でも、そこに僕自身の創造性を発揮する余地は残されてない。観客も僕の踊りを愛してくれていましたが、変化を恐れすぎていた。自分らしくあることも、少しでも何かを変えることも周りが許そうとしないなら、僕が変えてやる。そう決心したんです。ダンス・クラシックの世界でやるべきことは、もうやり尽くしました。すべての役をもう踊ったし、たとえば今から八年後にも『ドン・キホーテ』や『白鳥の湖』や『ライモンダ』を踊っていたとは思わない。何か新しいことをやりたい。新しいことを学んで、もっと多くを吸収して、身体を千通りの方法で動かしてみたいんです。」

一方のジョナサン・オリヴィエは、ノーザン・バレエ・シアターやアルバータ・バレエで多くの作品で主役を務めた後、より商業的なフィールドに踏み込みました。アダム・クーパーを一躍スターダムに押し上げ、前出のパストールもかつて踊ったマシュー・ボーン

の『白鳥の湖』のザ・スワン役として契約したのです。

『白鳥の湖』は、1995年の初演のときに観ました。当時僕はまだランベール・ダンス・カンパニーにいましたが、これを踊りたいと思ったのを覚えています。その時から、僕にとってずっと記念碑的な作品です。今回の再演のために、まずステップを覚え、次にスタッフがその意図を説明してくれました。いったん振りが身体に入ってしまったら、役作りはやりやすいですね。今回特にありがたいのは、マット(マシュー)がつきっきりでいてくれたこと。彼は二つ三つの作品を同時に準備していることが多いのですが、今は『白鳥の湖』に専念していて、僕たちが独り占めできる。マットはみんなに情報をたくさん与えてくれて、僕たちが物語を伝えるベストの方法を見つけるのを助けてくれます。少しずつ変更を加えて作品も磨き上げていますし、男性の群舞はより大がかりになって、舞台に出る白鳥の数も増えました。僕の踊るザ・スワンは、深く没入できる役ですね。二時間の間別世界に運ばれて行って、舞台上に立って観客の前で踊っていることさえ忘れてしまいます。とても踊りがいいがあります。」

オペラハウスというのは贅を尽くした大作に似つかわしい華やぎをもたらししてくれる場ではありますが、より小規模な劇場にもじっくり収まるバレエ作品もたくさんあるもの。たとえばマンチェスターのダンスハウスは、デイヴィッド・ニーダム版『コッペリア』の上演に理想的な場所でした。マンチェスター・シティ・バレエ(ノーザン・バレエ・スクールの生徒たちが古典作品を上演するための団体)がここで12月に短期間の公演を行ったのですが、じつによくできており、美術も魅力的ならダンサーも高い集中力で目を引きました。ホフマンの原作では陰鬱だったこの物語の明るい面を、マイムで明確に伝えていたのが印象に残ります。

同校には日本人も多数在籍していますが、スワニルダ役のマツミヤ・リエは、アダム・デンマン演じる浮気なフランツのあごに一撃を加えるはねっかえりの少女を巧みに演じました。涼しい顔でパンシェを続けるなど技術的な完成度も高く、コッペリウス博士の工房でのスペインの踊りでは目ざましい技巧を發揮しました。クライマックスのパド・ドゥのアダージュでは、デンマンを相手に片足のポワント上で永遠に立ってられるかと思われるほど余裕を持って、ゆったりと回転しました。一方マツモト・ユキコの「暁」は魅力的で、ルーシー・ギャラガーは「祈り」を周到に踊りました。日本でのオーディションを経て今年入学した、クス・カナエとコイデ・ミサも印象的でした。